

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第57号 2005.4.8

発行
北海道ポーランド文化協会
〒011-0029
札幌市北区北29条西12丁目2
-16
佐光伸一
電話・FAX 011-727-1520

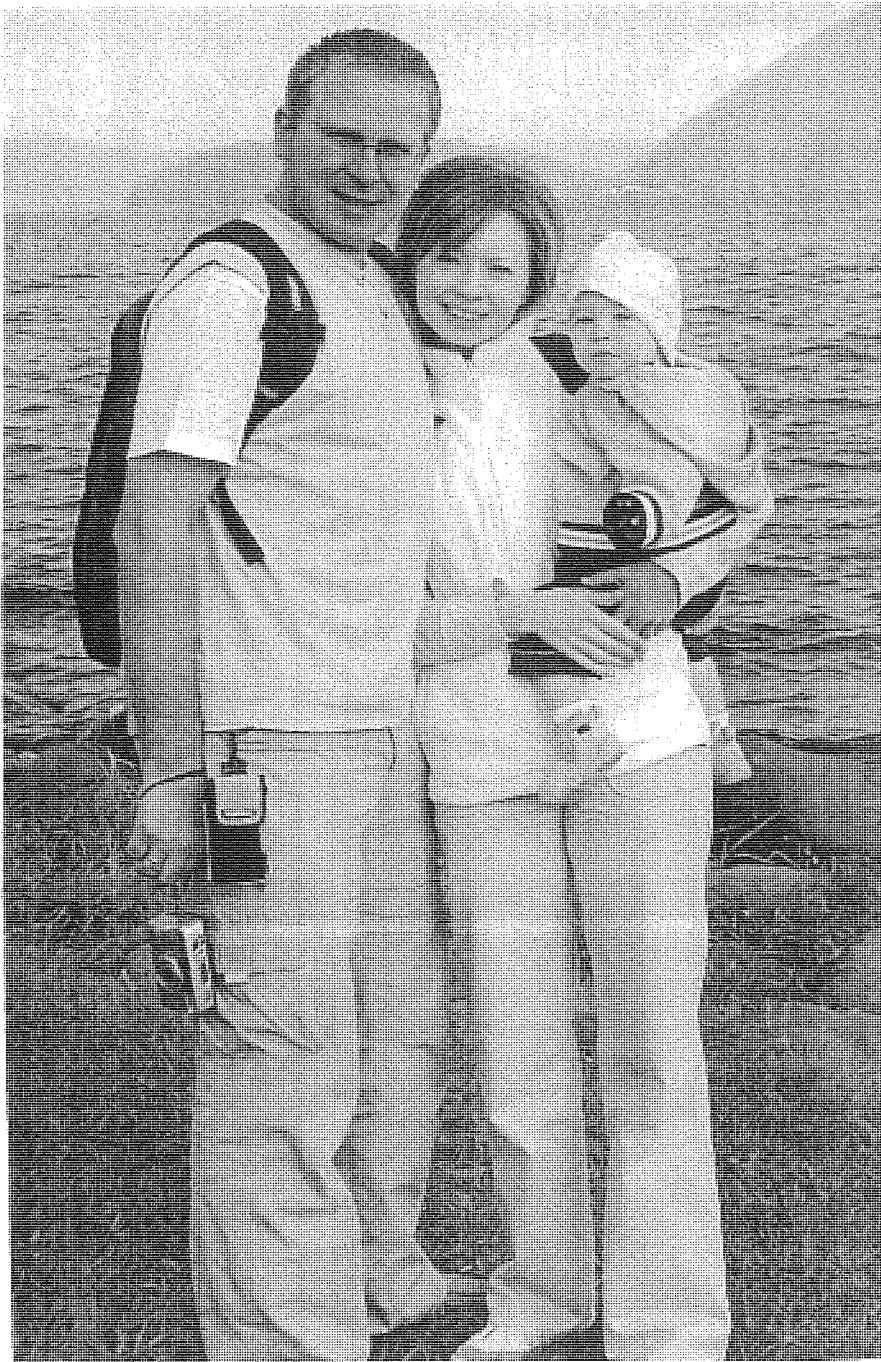
新連載エッセイ

ポーランドの道産子

私たちは、大学の勉強を終えてまもなく結婚し、すぐに日本にやってきました。私たちは若く、これから住むことになるだろう世界と国に対する好奇心でいっぱいでした。始めはここに1年半だけ滞在する予定

だったので、子供を作ろうなどという考えが浮かぶこともなく、1年半という時間を、日本のさまざまな場所を訪ね、ひとと知り合い、文化を知ることに関心を持って過ごしていました。実際その通りになりました。日本での最初の数ヶ月は、学業はもちろんですが、それ以外には主として遊びに時間を費やしました。ここに後3年残ることになったと

き、自分たちの子供を作るという考えが徐々に生まれ始めました。しばらくの間それは単なる将来の計画に過ぎませんでした。私たちは親の役割を果たせるほど成熟していましたが、まったく別の理由で私の方に精神的な準備が出来ていなかったのです。というのも当時の私の日本語の知識は不十分で、このことでもいつも不慣れな思いをしてきたからです。そういうわけで勉



強に取り掛かり、いくつかの日本語のコースに登録しました。そして時は流れていきました。

私たちの周りの知り合いの夫婦たちが、子供の誕生という喜びにあふれたニュースをますます頻繁に知らせてくれるにつれ、友人たちがもう子供を生む決心をするほど勇気があることに対し、私の中に一種の嫉妬心のようなものが生まれました。というのも私は絶えず怯えていました。おそらくもっとも怯えていたのは、一番近い家族から遠く離れたよその国で、自分たちだけではうまくやっていけないのではないかということ。しかしついに転機となる日がやって来ました。自分を信じる心を与えてくれたのは、私の日本語の先生でした。あるメールで彼女は二番目の子供をアメリカで生んだと知らせてくれました。彼女も自分の母国から遠く離れ、頼れるのは夫だけで、それに加えさ

な子供を二人も抱えていたのです。そのとき私の念頭に次のような考えが浮かびました。この世にはきっと私と同じような状況にありながらも自信をもっているに違いないと。どうして私に出来ないことがあるでしょうか。

私たちが親になると知らされた日は、おそらく長いこと私たちの記憶に残るでしょう。それは大きな喜びでした。この喜びは、子供の将来の計画を立てること、子供の名前を考えること、私たちの小さな部屋に子供用のベッドを入れるために家具の配置を考えることと結びついています。妊娠したということを確認する前に、この嬉しい知らせをポーランドの両親ともう分かち合っていました。すぐに病院に行かねばなりません。一番近い産婦人科がどこにあるかインターネットで調べ、翌日に出かけました。中に入ると、待合室がうす暗いのにぞっとし、患者が全く誰もいないのに驚かされました。それに加えて、

私たちが腰掛けたソファから、眺めた雑誌にいたるまで、ここにあるものすべてが古ぼけていました。お医者さんまでが年寄りで、あまり親切なひとではありませんでした。検診が終わって私たちが医者から耳にしたのは、「おめでとうございます」というお決まりの表現ではなく、「産みたいんですか」という質問でした。「一体何を聞くの!」と私は思いました。「こんなに長年にわたる経験豊かな医者が、自分の患者の顔からこの喜びの表情を読み取れないなんて一体どういうこと!」。私たちがあらかじめカルテに書いておいた質問に対しても面倒くさ

そうに、短く答えただけでした。自分が妊娠したということ以外何も知ることが出来ませんでした。それどころかこのクリニックを出ながら、以前にもまして疑いと恐怖の念を感じ、震えながら確信したのです。「日本でなんて産みたくないわ!」
続く...

Edyta Rzepka エディータ・ジエプカ
訳 佐光伸一

ポーランドサイクリング連載第

二回 鳴神雅史

おさらい

自転車で外国を走ってみたい、国境を越えてみたい、という願いを叶えるために春休みを使ってドイツ・ポーランド国境へやってきた。ベルリンから東へ行くこと約80キロ、フランクフルト・オーデルとポーランド領スオヴィッツとの間に架かる国境の橋を超えて、いよいよポーランドの大地を走り始めた。

3. ポーランドの田舎道

急ぐ旅なので、都市間は列車で移動しなければならぬのだが、国境の町スオヴィッツから次のジェピンという街まで走ってみた。ドイツと違ったのは路肩の狭さだ。狭い国道は本州で走り慣れている。しかしそれを更に怖くするのが、ここポーランドではどの車もめっちゃめちなスピードで追い越していくことだ。100キロ、いや140キロくらいはでているのではなからうか?とにかく、轢かれて路肩の森に埋められでもしたら、永久に行方不明になるだろうと思ひ、後ろから車が来たら止まって道路の外で待っていることにした。幸いこのあたりの交通量は、2分に1台くらい追い越される程

度と少なかった。

草原の国のはずだが、この辺は深い森で、ゆるやかな登り下りが続く道だった。切換えギア無しの自転車で、はちよつと疲れるが、約30キロを走り無事ジェピンに着いた。

ジェピンという町は特急が止まるけれどもとても小さな町だ。駅前小さな商店がひとつ、通りを歩く人もめつたに見かけないくらい町の町だ。切符売り場ではロシア語で話したが通じなかった。すると隣にいた初老の男性がポーランド語に翻訳してくれて、すんなりと切符を買うことができた。次の特急までは時間以上あって待合室で退屈していると、この男性が話し相手になってくれた。病気に関する単語が分からなかったので正確にはわからなかったが、この人はおそらく糖尿病か何かで片脚を大腿骨から切断して義足で歩いていた。更に驚くことには、この人はホームレスで駅のこの待合室で寝泊りしているという。持ち物はアタッシュケースひとつだけで。週に一度、隣のさつき僕が通ったスウォヴィッツにある病院に通院しているそうだ。

障害を持ちながらもホームレスで暮らしている強さに驚くと同時に、どうして公的な援助が何もないのだろう、と不思議になると同時に、この人のことがとても心配になった。もしかしたら公的な支援はあるのかもしれないが、言葉の壁できちんと理解することができなかった。日本の基準で考えると、片足がないということで障害年金が出るはずなので、ホームレスになるほど困らないと思うし、たとえホームレスであっても、(1)とりあえず入院、(2)治療費を取れなかったら病院が困るのでかくかくしかじかの理由をつけて生活保護申請、(3)生活保護受給・住居で生活、というパターンがなくもない。隣のドイツでも市民はもちろん、出稼ぎで来た外国人にも手厚い生活保護が支給されることで有名だ。ちなみにその額は最低限の賃金で生活する市民よりも多いという逆転現象がおきているという。ポーランドではこうした公的扶助の制度はどうなのだろう?興味のあるところだ。

ぼくはいま医学部の実習で大病院のいろいろな科を週毎にまわっているが、一番興味がありそうだなと思っただけのことだ。例えば整形外科・神経内科・リハビリ科などだ。自由に行き

たい所へ行ける脚も、望んだ作業がスムーズにできる指もないととても困る。ぼくの夢は、手足をはじめなくしたヒトの体の一部を、細胞から再生できるような技術が実現すること。いまは通りすがりの旅行者である僕ができることは心配することくらいだけれど、近い将来この人にも脚をプレゼントできたらいいな、なんてSFみたいな事を考えてみたりもした。冬になったら駅は寒だろうけど、いまでも元気で暮らしているといいなと思う。

車窓から見える風景は、ワルシャワまで行けども行けども草原が続いている。この風景は十勝や釧路地方と似ているなと思った。今回の興味があったのが風景がどう変化していくかである。以前モスクワとロンドンへ行った時、同じ欧州でも風景がかなり違うことに驚いた。同時に、その中間にある国々はグラデーシヨンのように東へ行くにつれてロシア風になってくるのだろうか、と想像していた。列車で行くことでそれが確認できそうだ。

4. ワルシャワ(一回目)

夜ワルシャワ駅に着くと、英語を喋るポーランド人に話し掛けられた。プライベートルーム(いわゆる民宿)に泊まらないかというお誘いだ。

「地球の歩き方」に以前泊まった日本人がこの宿を紹介した記事のコピーまで見せる念の入れようだ。ユースホステルのほうが安いから、と言ったら同じくらいまで値引きしてくれるというので泊まることにした。

マレクさんはロシア語を話せるというので、僕もそのほうが少し楽なので彼の家族に会うまではロシア語で話していた。ところが彼の奥さんや小学生の息子さんに会ってからは、共通語はまた英語になってしまった。なぜなら彼らが言うにはポーランドでは必修でロシア語を習っていたのはもう昔のことだし、歴史的な理由もあってポーランド人はロシア語を話したくないのよ、と英語で説明された。さすがにここまでロシア語の印象が良くないのにこれ以上は使うことはできなかった。勿論このことでマレクさん一家の印象が悪くなったりはしない。誰だって学校でやりたくもない科目を強制されれば、その科目が嫌いになるのはよくあることだ。

ワルシャワの街を自転車走ってみて、ドイツの時よりも舗装の質がグリード落ちるな、と思った。車道と歩道の段差が高くて自転車走行には不向きだったり、自転車では絶対渡れない

ような大きな交差点があったり(東京や札幌でも同じだけ)、ドイツの時と比べて道路設計が自転車にやさしくないなあ、と思った。

5. リトアニア

朝早くにリトアニア領にある国境の町シェストカイという駅に行く列車が出る。マレクさん一家を起こさないように静かに出ていった。ワルシャワ駅で列車を探していると何とそのマレクさんは朝早くから客探しに駅に来ていてまた会った。詳しいことは聞かなかったが、おそらくマレクさんは自宅の一部屋を貸す民宿業で生計を立てているのだろうか。もう一度ワルシャワ駅へ行く機会があれば、また会いそうな気がする。

リトアニア行きの列車は全てこのシェストカイで乗り換えになる。リトアニア国内はロシアと同じ広軌なので、標準軌のポーランドの列車は走れないらしい。それにしても小さな駅で、国境の駅だというのに切符売りの窓口はたった一つしかなく、待合室も小さなベンチが二つあるだけだ。ウィリニウスまでの切符を買ったついでに、窓口の女性に近くに食堂か店がないかと聞いてみたところ、全然ない

言われた。(ちなみにここからは普通にロシア語が通じる)

しかし次のヴィリニウス行きの特急が出るまで二時間以上もあるもので、駅の周りを走ってみることにした。めちゃくちゃ広い!見渡す限り地平線は滅多にお目にかかれない、と感動しながら寒いなか自転車をコギコギ散歩してあるいた。しかしこの余裕のほのお散歩が後々仇となることにはこの時気づいていなかった。

ちょっと寒いから出発一時間前には駅舎に戻ろう、と思って駅に戻ると、「ヴィリニウス」と表示のある列車がホームから走り出そうとしている。僕の時計はまだ十五時なのに、駅の大時計を見ると十六時。しまった!ポーランドとは時差があるのを知らなかった!この列車を逃すと明日までない。この無人の荒野で野宿することになる。走り出した運転手に手を振って止まってもらおうとしたが、首を横に振って無視された。列車は歩く程の速度で走りだしている。ホームの上もおかまいなしにチャリをこいで、客車の開いているドアの所に立っていた女性の車掌さんたちに「乗せて!」と行ったら非常ブレーキをかけ

て止めてくれた。「早く乗って!」とせかさねながら低いホームから何とか自転車を引き上げて乗り込んだ。

矢体の一部を細胞から再生する研究は、世界中の研究者が実現に向けて先を争っている。例えば、交通事故や転落などの衝撃で脊髄が断裂してしまい、手足の麻痺になってしまった人に対しては、造血幹細胞という血液を造るおおもとの細胞から切れた部分の神経を再生するような研究が進んでいる。マウスの実験では脊髄の神経がわずかに再生したという報告もある。

標準軌・広軌:列車の二本のレール間隔をいう。標準軌は一四三五ミリメートル、狭軌は一〇六七ミリメートル、広軌は一五二四ミリメートルである。列車のレールの幅を他の国と違うものにするので進入されるのを防ぐために生まれた。広軌を採用している国はロシアのほかモンゴル、スペイン、ポルトガルがある。日本では新幹線や一部私鉄が標準軌のほかは、在来線は狭軌を採用している。これは他国からの進入を防ぐためというよりは、明治時代に建設費をけちって狭くしたためである。

2004・2005年度の事業計画決まる。

本年度の総会及び懇親会

2004年10月28日、かでの

2・7(中央区北2条西7丁目)

にて本年度の総会および懇親会が行われました。

総会

会長挨拶・灰谷慶三

①2003・2004年度事業および決算報告、監査報告

②2004・2005年度事業計画(案)と予算(案)

③事務局の移転について

④2004・2005年度役員

(案)について

⑤その他

懇親会

開会挨拶と乾杯

会食

閉会の挨拶

乾杯-Sto Lat

司会・佐光伸一

1 2003・2004年度の事業報告および決算報告

《主催事業》

(1)第47回例会・フランス時代のシヨパンとその作品

お話し・三浦洋さん ピアノ

小林美保さん、片寄ますみさん、ウィリアムス 美由紀さん

5月 1日(土)北海道近代美術館

ロビー(参加者約150名)

(2)第48回例会・キスリングとその時代のパリ

お話し・近代美術館主任学芸員 中村聖司さん

2004年8月21日北海道立近代

美術館ロビー(参加者約15名)

(3)15周年記念誌出版

2003年12月25日

(4)15周年記念誌出版記念祝賀会

2004年2月6日 すみれホテル

《その他》

ポレ発行 第54号(6月1日)

第55号(8月1日)計2回

総会 2003年10月17日(遠友学舎)

運営委員会 6月15日

《2003・2004年度決算報告》

別掲資料上段をご覧ください。

《監査報告》当協会の2003・2004年度の会計処理について監査を実施したので報告致します。

2 2004・2005年度の事業計画

(案)および予算(案)

《主催事業》

ピアノコンサート

《ポーランド語講習会》

希望により随時行う。

《後援事業》

音楽会、展覧会、映画会、講演会などを適宜行う

《その他》

会誌ポレ発行(3回)

総会・2005年10月ごろ

運営委員会・2回程度

《2004・2005年度予算(案)》別掲資料をご覧ください。

3 事務局の移転について

4 2004・2005年度役員

(1年任期) (案)について

顧問・谷本一之・遠藤道子

会長・灰谷慶三

副会長・小笠原 正明

運営委員・安藤厚・小笠

原 正明・琴崎多美絵・小林美保・

佐光 伸一・霜田 千代麿・中島

洋・三浦洋・渡辺卓、ポレ編集委員・小林美保・佐光伸一・三浦

洋

監査委員・富山 信夫・吉野 悦雄

事務局長・佐光伸一

5 その他

のひとときを持ちました。



2003-04 年度収支決算書

(自 2003 年 10 月 1 日～2004 年 9 月 30 日)

【収入の部】	予 算	決 算	内 訳	(単位：円)
会 費	240,000	294,870	会費全額(376000)の78%	
その他	0	0	銀行利息.寄付	
小 計	240,000	294,870		
繰越金	291,718	291,718		
合 計	531,718	586,588		
【支出の部】				
事業費	100,000	120,559	例会:49903 総会:28752	
連絡費	25,000	52,780	ポーレ発送,はがき・切手他	
編集費	8,000	8,640	ポーレ制作費,原稿料他	
15周年記念誌準備資金	85,000	110,075		
会合費	30,000	10,500	運営委員会他	
事務費	120,000	69,570	ポーレ発送人件費,資料コピー代など	
予備費	113,718	20,000	封筒,コンサート打ち上げ	
小 計	481,718	392,124		
繰越金	50,000	194,464	銀行預金:495 郵便局:40090 現金:153879	
合 計	531,718	586,588		

2004-05 年度会計予算 (案) (自 2004 年 10 月 1 日～至 2005 年 9 月 30 日)

【収入の部】	前年度決算	予 算	内 訳	単位：円
会 費	298,470	300,000	3000円*100人	
その他	0	0		
小 計	294,870	300,000		
繰越金	291,718	194,464		
合 計	586,588	494,464		
【支出の部】				
事業費	120,559	130,000	総会,例会等	
連絡費	52,780	50,000	ポーレ発送他	
編集費	8,640	8,000	ポーレ制作費他	
※15周年記念誌補助	110,075			
会合費	10,500	30,000	運営委員会他	
事務費	69,570	100,000	内訳:ポーレ編集印刷発送費(2回分)4万 謝金6万	
予備費	20,000	20,000		
小 計	392,124	338,000		
繰越金	194,464	156,464		
合 計	586,588	494,464		

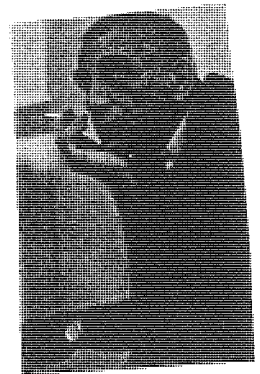
北海道ポーランド文化協会 第49回例会

クシシュトフ・ケシロフスキ《ふたりのベロニカ》上映会

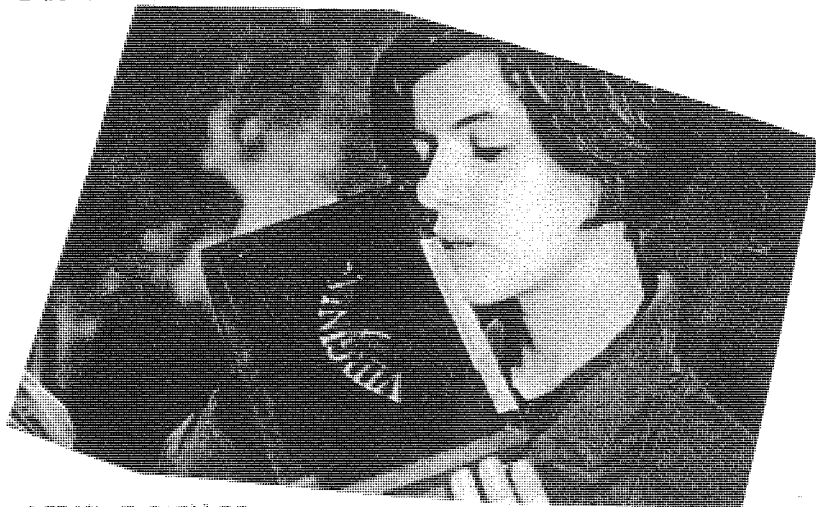
日時：2005年4月22日（金曜日）18時30分より

場所：かでの2・7（札幌市中央区北2条西7丁目 tel：011-231-4111）

1050会議室（10F）



来年の3月で死後10年を向えるポーランドの巨匠ケシロフスキの最高傑作をぜひもう一度、ご覧下さい。上映後、短い時間ですが懇親会も予定しています。



“世界のどこかに、自分とそっくりのもうひとりの人間がいるのでは？”

ポーランドとフランスで、同じ日の同じ時刻に生まれた瓜二つのベロニカとベロニク。ふたりの間には何の関係もないのに、いつもひとりぼっちじゃないような不思議な感覚があった。20年後大人になったベロニカはオペラ歌手に、ベロニクは音楽教師になっていた。人生のある瞬間に神秘的な力でふたりの運命は結び合わされていく。

ふたりの女性を巡る不思議なラブ・ストーリーを深い映像美で綴った作品。早世したポーランドの巨匠クシシュトフ・ケシロフスキが「偶然」と「運命」、「孤独」と「愛」など生涯追いつづけてきたテーマを凝縮させた彼の最高傑作。

1991年 フランス＝ポーランド Podwójne życie Weroniki

【Staff】 監督クシシュトフ・ケシロフスキ 脚本クシシュトフ・ケシロフスキ/クシシュトフ・ピエシェヴィチ 撮影スワヴォミル・イジャク 音楽ズビグニェフ・プレイスネル

【Cast】 ベロニカ：イレーヌ・ジャコブ 父（ポーランド）：ヴワディスワフ・コバルスキ
アンテク：イェジ・グデイコ アレクサンドル・ファブリ：フィリップ・ヴォルテール 父（フランス）クロード・デュヌトン



2004・2005年度第1回運営委員会について

2005年3月11日、北海道大学高等教育機能開発総合センターにて第1回運営委員会が行われ、以下のことが決定されました。

1 今年度の活動について

例会は4月、8月、10月の3回行う。第回は4月下旬に「ふたりのペロニカ」の上映会を行う。今後は、ポーランド料理教室、ピアノコンサートなどを開催。
2 ポーレについて

3月、7月、9月の3回発行。連載ものの記事を増やす。

3 会費について、学生料金の設定について

若年層の会費を積極的に増やすために、会費の学生料金（1500円）を設定。

4 人事の変更について、新しい運営委員会について

北海道大学スラブ研究センター研究員・越野剛氏、北海道大学医学部・鳴神雅史氏が新たに運営委員に推薦され承諾される。

これまで長年にわたり本協会の事務局長を勤めてこられました小笠原正明教授が事務局長の職を終えられ、新たに副会長に就任されました。

新しい事務局長には佐光伸一が就任し、これに伴い事務局の連絡先が以下の住所に変更になりました。

〒001-0029

札幌市北区北29条西12丁目

216コーポラス阿部7号

TEL: 011-727-1520

email

ssamitsu@hotmail

com

遠藤道子氏が顧問に就任

北海道ポーランド文化協会設立時より副会長として活躍しておられました遠藤道子氏が体調の不良を理由に、2003・2004年度を最後に副会長の職を辞退したいとお申し出がありました。協会の発足時より副会長として協会の発展に大きな貢献をしてくださりました遠藤先生には顧問としてぜひ協会に残っていただきたいと思います、その旨事務局からお願したところ、快諾してくださいました。

1987年の協会の設立時は北大関係者が中心となって協会を発足することになりましたが、

そこに当時日本シヨパン協会北海道支部・支部長、北海道教育大学教授であられた遠藤先生が参加してくださいましたことで、とりわけ音楽関係者が多く協会に参加してください、この協会は一般市民を広くとりこんだ活力ある文化交流の組織になることが出来ました。先生は1986年にポーランド政府からポーランド文化功労賞を贈られることに象徴されるように、北海道だけにとどまらず日本とポーランドの文化交流に大きく貢献なさっています。

遠藤先生にはこれからも顧問として、協会の活動の様々な相談に乗っていただくと同時に、催しにも広く参加していただきたいと思います。

事務局長 佐光伸一

会費の納入はお済みですか？

(2004年10月～2005年9月分)

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。上記の年度分の会費の納入を宜しく願います。

《会費振込銀行口座》

北洋銀行 大通支店

(普) 301-0605084

北海道ポーランド文化協会

事務局長佐光伸一

《郵便振替口座》

02740 - 5 - 19735

北海道ポーランド文化協会

普通会員 (年額) 3,000円

維持会員 (年額1口) 5,000円

学生会員 (年額) 1,500円

「ポーレ」編集委員会

小笠原正明・小林 美保

佐光 伸一・三浦 洋

Tel/Fax 011-727-1520

(連絡先) 佐光

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 57 号 (2005 年 4 月)

目 次

エディータ・ジェプカ〈新連載エッセイ〉「ポーランドの道産子 (1)」佐光伸一訳……………	1
鳴神雅史「ポーランドサイクリング (2)」……………	3
2004-2005 年度の事業計画決まる～ [第 18 回 2004-2005 年度] 総会及び懇親会報告 [2004.10.28] ……………	5
〈第 49 回例会〉クシシュトフ・ケシロフスキ「ふたりのペロニカ」上映会 [2005.4.22] ……	7
2004-2005 年度第 1 回運営委員会 [2005.3.11] について [報告：事務局長は小笠原正明さん から佐光伸一さんに、副会長は遠藤道子さんから小笠原正明さんに交代、遠藤道子さんは 顧問に就任] ……………	8